

School Management vol.0

Learning Management Systemを活用している実践校事例として寄稿いただきました。

フルクラウド統合型校務支援システムを通じたカリキュラム・マネジメント

関西国際大学 客員教授
神戸山手女子中学高等学校 校長
平井 正朗

コロナ禍は、一人一台の端末環境の整備から始まり、個別最適な学びを具体化させるのと同時に、新学習指導要領が標榜する協働的な学びを加速させた。前者の代表的なツールがオンライン教材、後者が探究学習。その意味で、経済産業省の「未来の教室」が果たした役割は大きい。教訓は、対面授業とオンライン双方向型授業、さらに学習管理システム(LMS: Learning Management System)によって進捗状況を把握できるオンライン映像授業をいかに組み合わせるか。特に、いつでもどこでも視聴できる映像の場合、自己調整しながら勉学に取り組み、到達度を適宜把握できるものの、生徒の課題となるのがモチベーションの維持と学習習慣の定着、教師の課題となるのが教育機器の習熟とファシリテーターとしての役割である。一般的な教師像と言えば、教科単位で知識を教え、その再生に従事するイメージが強いが、なんといっても主役は生徒。当然、教師は勉強の内容だけでなく、やり方を教え、自学自習できるように伴奏することが求められる。時代が変わり、「主体的・対話的で深い学び」と言い方が定着したが、コロナ禍は不易流行を改めて再確認させてくれた。しかし、日本独特の伝統的な学校文化がある以上、「点」を「線」にする具体策が不可欠。教師の力量開発は本人の努力もさることながら、「チーム学校」としての組織的取り組み、つまり、それがカリキュラム・マネジメントにつながるのである。

勤務校を例にすれば、「学びの選択」を可能にし、多様化する生徒の進路を実現するために産官学協働を打ち出し、教育実践に資するようにしている。学校改革をスタートさせた2021年に経済産業省の『先端的教育用ソフトウェア導入実証事業』における実証校として複数社の教材を仮採択し、半年間で精査した。現在、中学では5教科の教科書準拠版『デキタス』（城南進学研究社）、高校では『スタディサプリ大学受験講座』『スタディサプリEnglish』（リクルート）、数学で『Qureous』（河合塾）を活用している。2023年からは新設したグローバル選抜探究コースを対象としたイマージョン教育の一環として『V-code』（イージア）を採択した。

生徒にはタイムマネジメントシート（学習計画表）を作成させ、非認知能力育成も含めたコーチングを行っている。「スタディサプリENGLISH」のEフェスタでは、高2が全国11位、高1が全国17位になるなど、費用対効果が見られた。今年から校内の情報一元化を図る意味で、フルクラウド統合型校務支援システムを導入し、コース別にタイムマネジメントシートをリニューアルし、“見える化”に努めている。出席、学習、成績の管理や生徒、保護者、教員への連絡、入試管理など、これまでパートで処理していた校務が一元化されたことで教員間の連帯感につながり、働き方改革にも対応できるようになった。

文部科学省は、教員の経験則に頼る授業からの改善を目的に、デジタル端末に蓄積された学習データを活用する方針を示している。重要なのはデータを利用して質の

向上を図ること。学習状況と学力との相関や効果的な指導法の開発が期待できる。教員養成にも有益だ。これまで日本の学校では、スキルの高い教員のノウハウを継承しながら、指導法を構築してきた感がある。しかし、教員の校務が荷重になっている昨今、デジタル化は若手育成に加え、働き方改革にも寄与するのである。2024年度からデジタル教科書が導入され、板書中心の一斉授業が転換点を迎える。勤務校も「令和5年度学びの保障・充実のための学習者用デジタル教科書実証事業校」となったのを機に、データから得られた知見を積み重ねることにしている。

めざす理想形は、文部科学省の「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策」の「未来のイメージ・スナップショット」に描かれている。「教師の視点」では、登下校の段階からの情報共有、学習状況をデータで確認してから教室に向かい、授業ではディスカッションを組み込み、考え方を端末に書き込んで発表する機会を与える。そして、グループ内での発話量から到達度を把握、指導に活かす。授業が終われば、集積されたデータから課題を抽出、高大連携も含めて対策を練り、どのようにアプローチするかを検討する。「子供の視点」では、欠席しても授業動画や課題が送られ、授業中、先生と生徒がどのようなやり取りをしたかが分かり、PCを開くと復習すべき問題がリコmendされる。「保護者の視点」ではスマートフォンを見れば、連絡事項や学校での状況が即座に確認することができる等々。大切なのは、最先端技術を駆使して生徒のポテンシャルを最大限に引き出すこと。グローバル化、DX化に即応する学校創りはこれから本番を迎えるのである。